
終わらない夏物語

スージー石見

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終わらない夏物語

【著者名】

スージー石見

【あらすじ】

○レ生活と故郷をあとにして夏美のロンドン暮らしがはじまる。再会と新しい出会い。彼女の旅はどこで終わるのか。

第一話 出発

その頃、私はハムステッドでオーペアをしていた。ハムステッドはロンドンの郊外の住宅街。金持の人たちがいっぱい住んでいるところ。大きな芝生の敷地にダッチハウスではなく一軒や、ガレージ、犬小屋、プール、執事やガードマン、管理人がいたり。オーペアといつてもいうことをきかない生意気なガキの面倒をみたり、めんどくさい家や庭の掃除をするのではなく英語学校のかたわら、飼っている犬のシエットランドシープドッグの年寄り犬のBobbyの世話ををして週給30ポンド。1日4回ほど散歩をさせる。早く言うとおしつこや糞の世話。時々近くの公園に連れて行ってよその犬と遊ばせる。

仙台の商業高校を卒業したあと、水産会社で10年ほどOJTをしていた。自分よりだいぶ年上のオールドミスを横目にあんな風にはなりたくないところに誓った。（何が楽しくて生きているんだか）高校時代の同級生ミキがロンドンから絵葉書をおくつてよこした。それにはお手伝いさんのような仕事をしながら気楽に暮らしていると書いてあった。最後に今年の夏に遊びにおいてとつけくわえてあつた。

彼氏などいないがせめて結婚する前に外国暮しを経験してみるのも悪くないと思い、3年間ためた貯金をもろして旅費を用意した。上司には2週間の休暇願いを提出し、仕事が意外と暇な時期なので文句なく簡単に許可をもらつた。

切符が手に入つてすぐ友達にロンドン着の日付と時間を書いたはがきを送つた。

第一話 到着

仙台から羽田空港までの夜行のバスがでていて10時半発のに乗った。今回の旅行のために大きい茶の合成だけど丈夫そうなボストンバッグとガイドブックを買った。荷物は最低限に抑えるがバッグはかなり重くなってしまった。2枚のTシャツ、もう1本のジーパンと洗面道具、2、3冊のペーパーバッグ、ガイドブック、それにいくつかの気に入りのテープと小さいラジオカセット。駅を出てアーケードのレストランや居酒屋のネオンが終わると真っ暗なオフィス街にポツンとバスの待合所の明かりが見えた。思っていたよりたくさん的人がいた。ほとんどは日本人でフィリピン人らしい若い女の子もいた。みんな朝早くの飛行機に乗るんだろう。バスは朝の5時に着く予定。私の飛行機は6時半に離陸する。2時間もあればゆっくり朝ごはんもたべられるだろう。夏がくるまで2ヶ月ほどあるが開いている窓から入る夜の空気は生暖かい。窓口で切符を買ってベンチに座り、テレビがついていたがニュースなので見るのをやめる。何度も読んだ本を取り出して目を通す。不思議なもので寝る前に少し読むだけで眠くなる。なんとか時間をつぶしていると1台の観光バスが着く。初めて乗る飛行機と海外旅行に緊張して寒気ます。昨日の夜、東京空港の税関の列で順番を待つが場所を間違つて自分の乗る飛行機に間に合わない夢を見た。どうしよう。どうしよう。アナウンスがバスに乗り込むようにと案内をする。明かりのついたバスに乗り込む。万が一、バスが交通事故にあわない限り、ロンドン行きの飛行機に乗る。これは夢じゃない。ほっとする。バスはゆっくりとターミナルから発車する。窓から明かりの消えたデパートや通りを見る。27年間みた町だけど夜見るとなんか違う感じ。30分ほどすると高速に入り、窓からはコンクリートの壙しかみえない。私の隣の座席には誰も座っていないので仕切りを上げて横になる。ちょっと窮屈だけど寝るには座るよりこのほうが楽だ。空港に

着くまで何回か目が覚めて窓から外を見てまた眠る。バスは知らない町をいくつも通り過ぎる。もう空港の近くなんだろう、夜が明けていた。あきれるほど晴天。五月晴れ。なんだかわからないけどラッキー。税関員らしいのがバスに乗込んできて1人1人のバスポートとボーディングチケットを確認。やつと空港に入る。

離陸のときはジャンボのびっくりするほどの大轟音で怖くなってしまった。小さいとき雷音が怖くて布団に隠れたり、高校の帰りに大地震に遭つたときもかなり怖かつた。目の前で10階建てのビルの窓からガラスが落ちてきて足の裏で地面が揺れるのを感じた。飛行機の翼が風圧で揺れるのを見て何回、飛ばされないようにと神様に（信じないくせに困つたときの神頼み、もし神が存在するならば勝手にしろっていうだろう）祈つた。さすがに14時間の間に少しぐらいの揺れにはなれてしまった。私のコリアンエアーは釜山で給油をしてヒースローではなく新空港のガトウイックに着陸した。地面に何か走るもののが見える、リス。14時間の飛行時間はちょっと長かつたが3回の冷たくまずい食事と同じテープを何回も聞いてもうどうしようもないほど飽きてしまつたころにやつと目的地についた。また新しい緊張。今度は本当の緊張。

飛行機の着陸をコントロールする赤毛で青い目のイギリス人（だと思う）を見て第二次世界大戦のとき、日本人が彼らを鬼のようだといつても不思議ではないと思った。日本で言うとこの時間は夜だというのにまだ陽がさして仙台より暑く、半そでのTシャツとカーディガンでちょうどよかつた。夏時間のせい。飛行機からの長い廊下が終わると税関に着いた。英語がわからなかつたらどうしようと困つているうちに質問もされずにパスポートに観光ビザのはんこを押されて單なるHello, how are you?だけで終わってしまった。ほつとする。時計をみると予定より30分ほど早かつたのでミキはたぶんまだ来ていないだろうと思ったが予想を見事裏切り、彼女は出口にいた。2年ぶり。ひさしぶり、元気そうじや

ない。服装はイギリスっぽくて目立たないけど顔立ちはまったくの日本人。美人じゃないんだろうけど二重のちょっとと切れ上がった目、ヨーロッパ人の色白と違う日本人の色白、そばかすがすこしある。メイクといえばオリエンタルを意識した真っ赤な口紅、アイシャドーなし、きつめのアイラインとマスカラ。十分魅力的。モデルになるくらい目立つ。だいぶ変わったね。仙台にいる頃からミキ、格好よかつたけどロンドンでもこっちの子に負けないくらい格好いいじゃん。ぴったりした黒のタンクトップ、ショッキングピンクのミニスカートと夏だつていうのにロングブーツ。

日本でこんな格好をしてたらお母さん、外にだしてくれないもんね。あっちの人つて古いからさ。歩きながらタバコ吸うなんてもつてのほか。離れてみて仙台、いいところだつてわかつたけど、でもあたし、ロンドンのほうが好き。なんたつて流行や他人に流されないで自分らしく片意地はらないで生きていけるからね。あたしなんかこっちの日本人社会に属してないから楽なもんよ。日本人の友達が何人かいいるけどかなりうるさいって。

そう言つてミキはSILK CUTに火をつけた。まだ見たことない自由を満喫しているようでそんなミキがとてもうらやましかつた。あたしの知つてる爺さんのB & Bに連れてくよ。1日12ポンド、コーヒーとシリアルのアメリカンじゃなくてイギリスの伝統的朝ごはん付き。

私には1日12ポンドが安いのか高いのかちょっと想像がつかない。昼ごはんと夜ごはんもあるけど中華のテイクアウトかサンドイッチかなんか買つたほうがいいよ。こっちのご飯はおいしくないから。おなか、空いたからさ、最初に荷物を預けてご飯にしよう。

何回か地下鉄を乗り換えてやつとウェストハムステッド駅に着いた。主人のコッホは70歳くらいのユダヤ人で第二次世界大戦のドイツからの移民ということ。私の部屋はレストランから2分ほど。バスが通る大通りから酒屋の左に曲がって住宅街に入り、50メートルほどいったとこ。典型的なダッヂハウス。

玄関の電気は消えている。

夏美、きっと気に入るとおもつ。

結構広い屋根裏のエスツュディオでベッドが2つあるから友達を泊めたり2人が暮らしえできる。真ん中にちっちゃな台所のセットとカウンター、飾りの暖炉がある。なかなか、おしゃれ。古ぼけてるけどこっちの人は部屋の配置をするのがうまい。トイレとシャワーは共同。

なんだかんだしてるうちにもう外は夜。大通りに出て食べ物を探す。スーパー・マーケットの明かりが見える。レコード屋と古着屋はもう真っ暗で開いてるのは中華総菜屋とフィッシュ・アンド・チップス、カフェ。薄暗い公園のベンチで白身の魚のフライとフライドポテートを買ってこれから始まる新しい生活にコーラとピールで乾杯。夜の空気が生暖かい。ミキは私が迷子にならないようにと玄関の前まで送つてくれた。仙台の母に電話をしようと思ったがシャワーも浴びずにベッドに横になる。明日にしよう。目が覚めて枕もとの腕時計をみると6時半、冗談じゃないまだ起きる時間じゃない。「ゴブラン織りの時代遅れの緑のカーテンを通して太陽が見える。天気はいいらしい。向かい側の窓だらけの大きいマンションの廊下が見える。顔は見えないけど若い男の子が上半身裸でうろうろしている。目が合つたわけじゃないけど覗き見をしたようでちょっと恥ずかしい。タバコを一本吸つてまた寝る。もう一度目が覚めるとパジャマ代わりのTシャツにGパン、ちょっと肌寒いかもしけないのでカーディガンを羽織つて外に出る。とっても不思議な感じ。自分が外国にいるなんて信じられない。小さいころから旅行は好きだつたけどまさかあの頃、今の私がヨーロッパに来るなんてどうしても考えられない。玄関を出て昨日、来た道を駅の方向へいってみる。テレビや雑誌で見たあの有名な二階建ての赤いバスが目の前をゆっくり通る。コッホのレストランに入る。ウェイタレスのスイス人女性のウツィーが朝食メニューを聞きに来る。コンティネンタルかイングリッシュか。60歳近いんだろう、年増なのにO-Lのようなひつつめ髪、

長いスカートにエプロン。中世期の魔女のように。初めてのイギリス朝食。

第三話 ウエストハムステッド商店街

コーヒーが飲みたい、どこかで飲めるところないだろ？ 外に出る。化粧品や電器屋、アクセサリー屋、靴屋なんかがならんでいる。ちょっとした下町商店街って感じ。ちょうど駅の隣にカフェーがある。長いテーブルに結構いっぱい人がいる。ほとんどが男。そう、今日は日曜日。ちょっと抵抗を感じるがおそるおそる入つてみる。セルフサービスらしくウェイターもウェイタレスもない。高校の学食みたい。カウンター越しに台所が見える。インド人らしい浅黒い若い男の子が注文を聞く。出来上がつたばかりの熱いコーヒーを喫茶店のコーヒーカップじゃなくて普通うちで使うようなマグカップに注いでくれる。どうもこのカフェテリアは労働者の溜まり場なんだろ？ ちつとも飾り気がなく壁には白菊の絵のカレンダーがぽつんと寂しくかかってる。窓際のテーブルの空いた席を探す。隣では40ぐらいのやたら鼻の高い赤と黒のチェックの木綿シャツを着た男が新聞を読みながらトーストを食べてる。その隣には彼の子供だろう、5歳ぐらいの男の子がミニカーで遊んでる。肩肘をついてぼんやり通を眺める。車が時々通る。向かいは雑貨屋らしく、SILK CUT、KIT CUTなんかのステッカーがついたシャツが下りている。隣の古ぼけたショーウィンドーには手作りらしい赤や青のビーズを使ったピアス、シルバーにカラーストーンの指輪などが飾つてある。香りはあるが味のないアメリカンコーヒーを飲むと自分の部屋に戻つた。コーヒーを飲んだのにやたら眠い。またベッドに入る。

第4話 義母の思い出

気がつくと10時15分。母に電話をかけないと。廊下にも公衆電話があるが小銭がないので話にならない。コツホのとこで20ポンドを換えてもらおう。レストランに着くと中にはたくさんの年寄りがほとんどのテーブルを占領してる。みんな背が高く、太っていてほとんどが金髪。ドイツ人の観光客らしい。老人とは思えないほど生き生きして騒々しい。コツホは年寄りの癖に朝が遅いらしくウツシ一人が忙しく食事を運ぶ合間をぬつてどうしたの?と私に聞く。日本に電話をかけたいんだけど20ポンドをみせる。OK、ちょっと待つてと答える。彼女は愛想はないけど親切。プロフェショナル。口笛を吹いてるのか鼻歌を歌つてゐるのかわからないけどペイズリーのフレアースカートをひらひらさせていつたり来たりする。厨房の近くに座つて彼女の仕事が終わるのを待つ。ベルが鳴る。イギリス風トーストが出てくる。空気が乾燥してるので外は固いけどなかは柔かい。特製のトースト用のパンじゃないけどとってもおいしい。10ほどあるテーブルには小さな花瓶に野ばらがさしてある。古ぼけたすすけたレストランが少しほは明るくなる。通りに面した大きな窓にも青いアジサイの鉢植えがあるのが目に入る。やつと老人たちへのサービスが終わる。私の番。

母さん、昨日の8時にこっちに着いた。私は元気だから心配しないで。こっちの天気?とっても晴れてる。また、電話するから。彼女のことを母さんと呼ぶが私の本当の母ではない。死んだ父の連れ合い。彼女はちょっと心配してると。今までほとんど一人でいたことがない。私を産んだ母はどこにいるのかわからない。私が5歳のころ、両親が離婚し、父は彼女と再婚し三人で生活するようになつた。3年前、夫に先立たれ、それから私と2人で小さいアパート暮らし。今は近くにある自衛隊の駐屯地の食堂で洗い物をしてなんとなく暮らしてる。父はアルコール依存症でうちにいる間はいつも本と

酒が欠かせなかつた。彼は自営業を行つていて1年のうち、半年は出張で家にいないこと多かつた。私が小学校の中学年ころ、不渡り小切手にあたり夜中に、借金取りがきてとつても怖い思いをした。おかげで1ヶ月ほどろくなものが食べられずそうめんの毎日だつた。彼女の苦労は続いた。ある日、父は出張先からいなくなつた。たまたま、用事があつて義母は宿泊先の旅館に電話をしたが泊まつていないとのこと。数少ない友人の一人に事情を話すと父がどこにいるのか教えてくれた。父と義母の間にどのような話し合いがあつたのかは知らない。冬休みのある日、あれは確か夕方だつたと思う。義母と二人で山形行きの急行列車に乗つた。珍しく冬の日差しは暖かく残り雪が汚くとけかかつていた。山形駅に着くともう夜だつた。タクシーに乗つて5分ほどで1軒の大きな家に着いた。門の呼び鈴を押すと中年の女人が出てきた。背が高く、赤毛のせいか色白で優しい感じの女性で山形訛りがある。彼女は義母と私の突然の出現に驚きもしなかつた。コタツのある茶の間に私を残して2人は家のどこかに消えていった。ちょうどニュースの時間で退屈なので家から持つたきた買ったばかりの漫画の本を開いた。コタツにあたつているうちにいつのまにか眠つていた。どのくらい寝ていたのかわからない。義母に起こされて夕飯をごちそうになつた。血の繋がらない女3人ほどんど無言のまま食事を済ますとほとんど何もない客間らしい布団の敷かれた1室に通された。今から考えるとそのときの義母の心中は穏やかではないだろう。そんなに遅い時間ではなかつたが私は布団に入り、続きの漫画を読んだ。義母は先に寝てるようについて出て行つた。それから5年後、父は山形の愛人の家で心臓発作を起こしてそのまま死んでしまつた。

第5話 散策

ミキと8時にコッホのところで待ち合わせ。彼女が仕事から解放されるまでだいぶ時間があるので一人でロンドンを歩いてみようと思、ガイドブックを広げた。今日は月曜日なので屋外マーケットはなかった。ロンドンは雨が多いと聞いていたので折りたたみの傘を持つてきたけどこの調子ではいまのところは必要なさそう。すりにすられないようここにウエストポーチを小銭とインスタントカメラを入れて玄関を出た。玄関を出て左側をいくと住宅街。同じような家が色違いで並んでいる。ピンクや黄色、パステルブルーがあり、バラが咲き乱れてる庭があるかと思うと手入れのしていない雑草の生えている庭があったり。歩道をはさんで路上駐車の列。時々、忘れたころに車が通る。どこからかインドの民俗音楽らしいものが流れてくれる。野良猫なのか家猫かわからないけどトラ猫がミャーミャーいいながら寄ってくる。とっても愛想がいい。時間が止まってるよ。昼ごはんはイギリスにも日本にも世界のどこにでもあるフランチャイズのハンバーーガー。黒人の子供たちのグループが母親同伴でわいわい言いながらハンバーーガーを食べてる。目がくりくり唇がぽつちやりしてみんなとってもかわいい。外に出ると大きなサッカーフィールド。眼くなつて芝生で寝。古着屋を2、3軒のぞいた後、時計をみるともう7時半。外はまだ明るい。案の定、ミキは先について本を読んでた。

「待つた？」

「ちょっと」

「どう? 外国暮らしだと日本は」

「仙台とはぜんぜん違う」

「ここは大都会だけどとても静か。時間のない町みたいでこそし不思議」

「ピカデリーへは行つた? 世界中の観光客でいっぱい。今の夏美は

私がロンドンに来たときと同じ、おのぼりさん。ここには東京や仙台にないものがある。地道でギターを弾いてお金をもらっている人がいたり、美術館でターナーの絵を見てるパンクの子がいたり「窓の外を見るとあの有名な赤い2階建ての古いバスが夕闇の中をゆっくり通つていた。

「夏美、いつまでいるつもり?」

「2週間の休みもらつたけどまだわかんない。もし、仕事がみつかつたらずっと住むかもしれないし」

「ホームシックにならないといいけど」

思い出すとミキとは小学校のころから、違う違う、幼稚園のころから一緒に。家も近く同じ町内会。いつも彼女はセンスがよくてかっこよかつた。成績も上のほうでそれに左ききのせいか手先も器用で時々私のどうしようもない浴衣やスカートの裁縫の宿題を手伝つてくれた。早くに父親に死なれて商業高校に在学中、小遣い稼ぎに少しモデルをしてたこともあるくらい。いつもいい成績をとつていたので一流の銀行へ就職できるだらうと担当の教師は言つてたが母子家庭ということでだめだった。仕事をすることと父親がいないということはなにか関係あるんだろうか。ミキがミキであることには変わらないのに。

「私もね、ホームシックというのが、日本に残した母親がちょっとかわいそうになつてね、自分の人生は自分のものと思うけどいまで私のために生きてきた彼女になにかしてあげようかと思うんだ」ミキは微笑んでミルクティーを飲んだ。

第6話 ミキの家

私たちはレストランの向かいからバスを拾つてカムデンタウンにあるミキの家へ向かつた。バス通りに不動産屋や喫茶店があるくらいであとは何にもなかつた。20階ほどの高層アパートの真向かいの比較的新しい全然飾りのない近代的な集合住宅が彼女の家。高級住宅街ではないが庭の手入れをする職人がいるんだろう、芝生やバラがきれいに整つていた。庭を横切つたとき、ベランダから1階に住む肌の浅黒いインド人らしい大家族がテーブルで食事をしているのがチラツと見えた。開いた窓からなんだかわからないけどおいしそうなにおいがした。共同玄関に入つて階段を2回まわると最上階につく。ドアを開けると短い廊下があり台所の向かいの右側の一番奥が彼女の部屋。彼女の家主は離婚歴のある中年女性で小さな女の子がいる。小さな部屋でそれでもたんすとテレビ、ベッドが2つ、窓際と机の上にあつた。彼女の部屋らしく、きちんと整頓されている。窓のトリロールのカーテンは彼女の手製らしい。

「夏美、よかつたらここに来なよ。ベッドも2つあるし。ここ、夏美の部屋ほど静かじゃないけど家賃が安いから。それに1人でいるより心強いだろうから」確かにミキの言つのはもつとも、万が一の場合、お互い助け合つて安心かも。

ミキはしばらく前にオーペアを辞めて午前中は語学学校へ行つて夕方は美容院でメークアップの仕事をしてゐる。「今はあんまりお金にならないけど満足してゐる。語学学校、終わつたらフリーランスになつてひとりで家を借りたい」

ミキは小さな鍋でご飯を炊いて豆腐の味噌汁と鶏のから揚げを作つてくれた。日本を出て少ししか経つてないので白いご飯がやたらありがたかつた。外に見える外人の子供たちをみると自分が日本にいるんじゃないのをつくづく実感した。

次の日もまた、晴れ。ロンドンは雨が多いと聞いてたがこの分では

しばらく降りそうにもない。外に出ると管理人のジョンソンに会った。彼の息子さんは日本にいたことがあるそう。白髪で背が高く、人懐こい親切なイギリス人で何か困つたら自宅に電話するようにと名詞をくれた。ロンドンで純粹の遭遇するのはむずかしいけどジョンソンのような人にめぐり合えたのはかなり幸運のよう。

「ミキ、私もしばらくここにいたい」私が突然、日本語で話したのでビックキーはびっくりした。ロンドンに着てからほとんど毎日、地下鉄とバスのバスを買って昼間はハイドパークやボンドストリートをふらついて夜はミキの家で夜ご飯を食べる。その晩はすき焼き、ミキは牛肉をビックキーはスペイン産の赤ワインを用意した。ミキはビックキーに簡単に説明すると彼女はミキと同じくどうするのかと聞いた。「ミキと同じく働きながら語学学校へ行く。英語できなくてもできる仕事ある?」ビックキーは前に学生寮の掃除婦をしていてくちを聞いてみてくれる。仕事が決まってから学校を決めたらいいとアドバイスしてくれた。2人は私の前途を祝ってくれた。次の日、8時半にハムステッド駅でビックキーと待ち合わせ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2033d/>

終わらない夏物語

2010年11月21日14時47分発行